

永井先生からのメッセージ No.15

～元小学校の先生から保護者の皆さんへ～

2023年 11月 10日

野毛山幼稚園

【子どもと文字 ～外国からの転入生に学んだこと～】

元小学校教諭 永井 裕

★晩年、私は、外国（中国・ブラジル・フィリピンなど）からの転入生たちに日本語を教えていました。（日本語教室）そこで、今回は、その日々の中で感じたこと、学んだこと、試みたことを、ほんの少しですが、お伝えしてみます。「文字を読んだり書いたり、はまだ早い。」かと思いますが、これからに向けて、何かの参考になれば幸いです。

① 文字が模様にししか見えない

こんにちは ♡

▶ 3年生のAさんは、ネパール人。

- ▶ そのAさんが書いた文字を初めて見たとき、私には、不思議な模様にししか見えませんでした。ということは、Aさんは、その逆。「ひらがなが 模様にししか 見えない」
- ▶ 我々大人にも、文字が模様にししか見えない幼児期があったはず。そのことを肝に銘じ、できるだけ子どもと同じ目線に立って、文字を教えていくことが大切。これが、私がAさんに学ばせてもらったことの一つです。

② 「ひらがな」だけでは終わらない

- ▶ Aさんだけでなく、外国籍の子どもたちは、様々な物の名前や意味を覚えながら、多くの「漢字」も克服していかなければなりません。



Q「漢字を覚える大変さは、日本の子どもも、Aさんたちも、同じだと思うのですが？」

A「同じではないと思います。なぜかという・・・」



- ▶ 例えば、「園」は、2年生で習う漢字。3年生のAさんは、覚えなければなりません。しかし、画数の多いこの漢字。Aさんの目には、複雑怪奇な模様に映るはず。けれども、1年生や年長さんには、たとえこの字が読めなくても、模様ではなく、どこかで見たことがあるような『文字』として映っているはず。毎日毎日、少しずつ少しずつ、家庭や幼稚園などで、様々な文字を目にしたり、その読み方を耳にしたりする。その繰り返しの中で、子どもたちは知らず知らずのうちに、「これは文字だな」と分かるようになっていくのです。日本語に包まれた幼児期が、いかに大切か!! そのことに、改めて気付かせてくれたのも、Aさんたちでした。

③ せめて「カタカナ」は楽しく

覚える楽しさ。子どもたちに好評でした。

『あいうえおカルタ』 永井版より



★鉛筆の濃さは、「6B」を使わせてみました。おすすすめです。

▼転入生たちは、「ふで」や「おはし」の使い方は、すぐ覚えます。しかし、難しいのは、鉛筆の持ち方の「クセ」を直すことです。やはり、最初が肝心。できるだけ見守ってあげてください。



例：直したい「クセ」



親指が人差し指にかぶさっている

力が入り過ぎ人差し指がそわている

Aさん初めての書き初め